

## 触媒学会会長候補者「経歴と会長としての抱負」

### 1) 候補者指名

朝倉清高（あさくらきよたか）

### 2) 生年月日

1958年6月12日

### 3) 略歴

1981年 東京大学理学部化学科卒業  
1983年 東京大学大学院理学系研究科化学専攻 修士課程修了  
1984年 東京大学大学院理学系研究科化学専攻 博士課程中退  
1984年 東京大学理学部化学科・助手  
1987年 理学博士（東京大学）取得  
1992年 東京大学理学部化学科・講師  
1993年 Fritz-Haber 研究所（ドイツ、ベルリン） AvH 奨学生  
1994年 東京大学理学部スペクトル科学研究センター・助教授  
1999年 北海道大学触媒化学研究センター（現在触媒科学研究所）・教授（現在に至る）  
2014年～2018年 北海道大学触媒化学研究センター（触媒科学研究所）長



### 4) 所属・職位

北海道大学触媒科学研究所・教授

### 5) 専門分野

表面物理化学

### 6) 受賞歴

1993年 触媒学会奨励賞  
2014年 日本表面科学会学会賞  
2015年 触媒学会学会賞（学術）

### 7) 会長としての抱負

次期触媒学会会長として所信を述べさせていただきます。

新時代に対応した触媒学会へと変革を円滑に進め、2028年のICC招致に向けた活動の道筋をつけることが私の責務と思っています。

予想される新時代では、人口が減少し、電子化とグローバル化がさらに進むと考えられます。触媒学会は電子化に対する対応をしっかりと進めています。触媒誌の電子化、ホームページの新装、そしてインターネット討論会の実現、SNSの利用が達成されてきています。さらに先日だされた触媒の未来を考えるWGの報告書は、今後の触媒学会の進む道を端的に示しました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）蔓延で、その流れは、加速しました。この電子化の流れをコロナ後に元に戻すのではなく、確実に定着させることが必要と考えます。触媒学会の効率化につなげることが目的です。委員会や会議はその性質に応じて、対面会議を開催することは必要と思いますが、インターネット会議を基本に考えて行きたいと思います。インターネット会議の長所は、空間的隔たりと時間の大幅な節約があります。北海道にすむ私が、これまでは会議日程がなかなかあわず、殆どの会議に欠席しましたが、2020年はほぼ全ての会議に出席しました。これは、革命的なことです。地方にいても、出張先でも会議に出席できることは、インターネット会議の最大のメリットだと思います。一方で、じかに会ってしかできない情報交換はありま

す。したがって、この両者をうまく組み合わせることで、最も効率的に議論が進めることができます。その定形を作っていきたいと思います。支部開催の研究会の運営の方向も大きく変わらないといけないと思います。これまでのように、現地に集まるのであれば、地域毎に行くことは意味がありましたが、これから、インターネット配信と併用になりますと、地域での研究会や勉強会などの考え方を大きく変えていく必要があります。議論して、うまく整理していくことで、会員の負担を減らし、より効率的なものができると思います。一方、年会・討論会は、対面を基本にしつつインターネット配信を併用したものにしたいと思っています。ここで考えたいことは、発表コンテンツの扱い方です。発表を録画、アーカイブ化し、発信することができれば、会員サービスの向上や社会への知の還元につながると思います。しかし、**発表コンテンツの権利関係についてきちんと考えないといけません。**“年会・討論会での発表を学会が勝手に録画して、会員に発信すること”は無条件で許されることではないと思います。しかし、この問題をさければ、この知的な資源が有効に利用できなくなります。どう言う手続きで、利用可能になるのか早急に議論する必要があると思います。こうした年会・討論会の発表コンテンツも含めて、触媒学会の保有する様々な知識の整理、集約や発信に取り組みたいと思います。知的財産の集積、発信は、社会貢献であるとともに、会員であることの最大のメリットともいえます。会員が会員であることのメリットと社会貢献という公益団体としての役割とのバランスをとりつつ取り組んでいきたいと思っています。

もう一つ重要な課題は 2028 年に ICC 招致をめざした地道な活動です。その中で、一つ取り組むべき課題として Web の英語サイトの充実があります。負担をふやさず、**Web サイトの国際化の可能性を様々な視点から議論したい**と思います。この取り組みは、ICC2028 の招致のみならず、増加しつつある留学生や外国人 Post Doc・研究者が会員となることへのメリットという観点から必要なことと思います。

最後に触媒学会は ” 腹藏なく胸襟を開いて愉快地に共通する触媒学を語り合う場 ” と思います。この観点を基本に活動していきたいと思っています。一方で、触媒の未来を考える WG の提言を提言として終わらせるのではなく、それを実行に移すことが必要と思います。よろしくお願いします。